海から海を学ぶ　04
「今度はカヤックそもそも論」

前回はそもそもカヌーとは？ということに言及したけど、今度はカヤックのそもそも論。英語でカヤックは、kayak やkaiakとも綴る。Kaiakはカイアックと発音する。アメリカの東部出身の人と話すと、カイアックというので、辞書を引いたらそう書いてあった。

元々は、アラスカやグリーンランドといった北極圏の沿岸や島々に暮らしているエスキモーやイヌイットなどと呼ばれる人たちが使っていた皮舟のこと。いや、なめした皮を使うから革舟と書いた方がいいか。スキンボートという言い方もある（レザーボートとはいわんけど）。

構造的には、細い木を精密に曲げ、クジラの腱などを糸にして結んだ骨組みを作り、そこにアザラシやトドなど海獣類の革をつなげた外被を作った上で張っていくのだが、精巧な術で防水構造になるよう縫い上げる。縫製技術が外科手術レベルだった。

極北の人たちは、旧石器時代から縫い針を作る技術を持っており、針を発明したことで動物の皮革を使った防寒着を作った。氷河期の、しかも極北で生き抜いてきたのだから、カヤックの縫製技術が洗練されていたと考えるのは自然なことだな。

カヤックは非常に細長い舟。長さは5mほどで幅は最大でも1mに満たない。人が座った状態で乗り込むが、乗る部分だけに開口部があり、あとはデッキで覆われる。細いために漕ぐための櫂は、両舷を交互に漕げるよう水掻きが両端についた長い櫂（双刃櫂、ダブルパドルともいう）を使う。伝統的な防水着であるアノラックやパーカの裾を開口部に固定して浸水を防ぐ工夫も特徴的だ。転覆しやすいように見えるが、技術があれば転覆はしないし、回復もすぐにできる。

起源は、遺物レベルでは2,000年から3,000年前ぐらいとされるが、それ以前からあったとも考えられている。遺物が出ないのでハッキリと分からんからだ。ちなみに、カヤックが使われていたアリューシャン列島に人類が進出したのは少なくとも8,400年ほど前で、最古の遺跡があるアナングラ島は、列島の東部に位置するフォクス諸島ウムナック島に隣接している。当時はすでに最終氷期が終わっているので海を渡ったはず。日本列島では、縄文早期にあたる。

アリューシャンの人々はアリュート族と呼ばれるけど、ウナンガンと自称しており、歴史的には孤立していたけど、17世紀までは25,000人程度の人口を継続的に維持していた。カヤックを使った海上猟を中心に大いに栄えていたことになる。この極北の地は、豊富な海洋資源に溢れていたからだ。ところが、18世紀のロシア人進出（侵略だな）と共に人口が激減していった。

彼ら独特のカヤックはイキャックと聞こえるような発音で呼んでおり、非常に洗練されたものだった。ロシア語ではバイダルカと呼ばれる。そんな彼らも、すでに300人ほどしかいない。

カヤックが文字として残るのは16世紀の終わり頃からで、中にはスコットランドあたりまで来ていたという伝承もある。元々カヤックは古トルコ語から遡ったチュルク祖語のカイークkayikから来たといわれ、トルコ語などでは今も小舟を意味している。チュルク祖語から派生したシベリア・チュルク語群のサハ語やドルガン語を話す人たちは北極海沿岸で現在も暮らしている。

シーカヤックと呼ばれるカヤックは、本来のカヤックをイメージしているけど、素材はプラスチックだし、用途も旅の道具となった。とはいえ、太古からのカヤック文化を継承しているともいえる。シーカヤックで海旅をする人たちは、極北文化へのリスペクトが強い。カヤック文化の継承者たる意識さえある。現在、シーカヤックは世界中に膨大な数があり（数100万艇規模だろな）海旅をする人たちが数100万人規模もいることは、意外に知られていない。